

図2. 洗浄前後の一般生菌数の推移

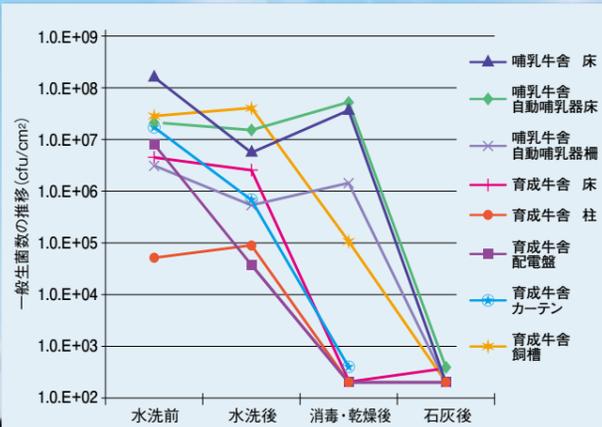


図1. 農場内見取り図

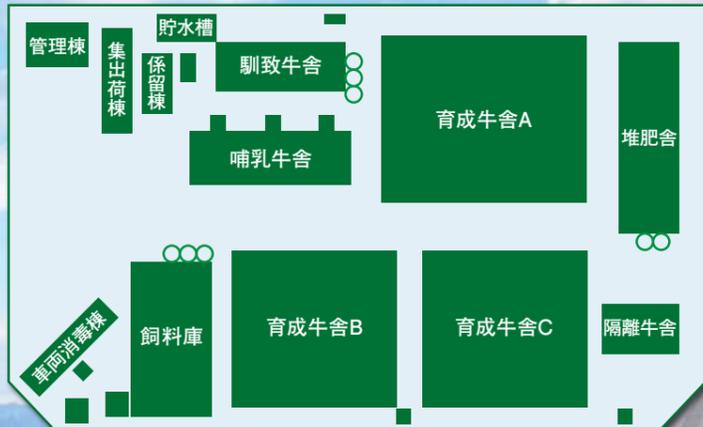


写真3. 洗浄のため回収した固形塩ケース

写真2. 馴致牛舎の仕切り

写真1. 馴致牛舎の様子

CASE STUDY

衛生管理の徹底で目指す 子牛事故低減

さまざまな繁殖農家から子牛を受け入れるキャトルステーションは、特に高い防疫の意識が求められます。今回は、衛生管理の徹底により低い事故率を実現している農場を紹介します。

<農場データ> JAからつキャトルステーション 常時飼養頭数:580頭 従業員数:7人(常時4.5人)

今回紹介するJAからつキャトルステーション(以下ステーション)は、佐賀県唐津市玄海町内の繁殖農家からヌレ子(約7日齢)を中心に受け入れる農場です。現在、約60軒の農家から年間約900頭を受け入れており、常時飼養頭数は約580頭です。最大の特徴は、徹底した衛生管理による事故率の低さであり、2011年にステーションが開業して以降、子牛の事故率は約1.5%と良好な成績を残しています。

動線を意識し 疾病の蔓延を防止

車両消毒棟を通り、集出荷棟で牛の移動をさせる以外は、外部の車両が農場内を動き回らないようにしています。管理獣医師などの車両も例外でなく、牛がいるエリアには乗り入れさせないよう徹底しています(図1)。

導入されたヌレ子は、係留棟から馴致牛舎(写真1)へと移動し、約2週間で哺乳牛舎に移動します。

馴致牛舎は、ベニールで仕切られており(写真2)、疾病が発生しても蔓延しにくくなっています。哺乳牛舎からは、離乳のタイミングに合わせて育成牛舎(A~C)に移動し素牛まで飼養します。繁殖農家から離乳後の子牛を受け入れる場合は、隔離牛舎にいったん移動し、疾病の有無を確認した後、育成牛舎へ移動させます。

徹底的な牛舎清掃と全農クリニックの利用

15年より全農福岡畜産生産事業所のクリニックを利用し、薬剤感受性試験やワクチンプログラムの提案などを受けています。その中で、洗浄・消毒方法をジェイエイ北九州くみあい飼料株式会社・株式会社科学飼料研究所・JA全農と再

確認しました。出荷後の牛房は次の導入に向け約2週間かけて洗浄・消毒を実施。壁や柱の洗浄にとどまらず、扇風機や固形塩のケースまで実施します(写真3)。最終的には石灰塗布を行い、牛舎内の一般生菌数を減少させ(図2)、清潔な状態で牛を導入できる環境を整えます。

関係者と農場で働く従業員が一緒に作業することで、作業の目的や重要性を再認識でき、意識改革のきっかけとなりました。

利用する生産者との連携により疾病を予防

同ステーションでは、哺育施設を持たない農家が多いことをふまえ、可能なかぎりどのような状態の牛でも受け入れています。最近では、一貫経営などで生まれた牛も増えてきています。このような受け入れ施設があることは、繁殖農家にとっても分娩間隔の短縮や、哺育施設が不要になるため母牛の増頭が比較的容易といったメリットがあります。また、出荷2カ月前の体重測

定には、農家が見に来ることもあり、農家とステーションとの距離の近さがうかがえます。

事故率の低減や、疾病の予防には繁殖農家の協力は不可欠です。川上にあたる繁殖農家から子牛が病気になるような管理をすることで、移動後の疾病の発生を抑えることが可能になります。これまでは免疫状態が個々に異なる牛を受け入れていたため、農場での治療が多くなりがちでした。しかし、定期的な意見交換会や勉強会の実施など、繁殖農家との信頼関係を構築しながら、ワクチン接種の指導などを行うことで、受け入れる子牛の斉一化を目標としています。

地域内一貫経営を目指して

現在、繁殖農家からステーション、そして県内の肥育農家へと牛を管理する仕組みができており、業務を分担し効率的な地域内一貫経営が現実となってきました。今後は農場規模を拡大し、地域内の和牛基盤の発展を目指しています。